



<同志社人が母校を誇りに思える情報>

「同志社ファン・レポート」(通巻 297 号)

「覚馬とゆく」(3)

— 人身の改革 —

おおしま ちゆうせい
大島 中正氏(同志社女子大学表象文化学部教授)



・衣食

新島襄は人心の改革をころざしました。たとえば弟子の大久保真二郎宛書簡(1887年5月29日)には「邦家のために尽さんとなれば、まず自己の改革を要するなり。まず人心の改革を要するなり。人心の改革なくして物質上の改革なんするものぞ。貴兄よ、願わくば心を虚しくして、天父の誘導を仰ぎ賜え。」と激励のメッセージをしたためています。

覚馬もまた人心の改革をころざす人であったからこそ、襄の同志となり同志社を結社したのでしょう。しかし、人心の改革とともに、人身、身体の改革の必要をも痛感する人であったということが、『管見』からうかがいしることができます。

たとえば「衣食」。「我が国の人、性質伶俐明敏なれども、往々事に堪へ兼ねる者あるは、その所以を尋ぬるに、養生の悪しき故なり。(中略)毛衣肉食を以って筋骨を健やかにし、氣力を養ひ人材を育成する、方今の急務なるべし(中略)」と述べています。

すなわち「日本人は本来聡明であるが、難局に耐えられない者がしばしば見受けられるのは、健康管理が悪いからである。(中略)毛織物を着、肉を食べて、筋肉と骨格を丈夫にし、氣力を養って、有用な人物を育てること。これが当面の急務であろう。」とでも現代

語訳できるでしょうか。

・醸酒法

「醸酒法」という項目にも「人身窮理を以って見るに、米の酒は養生に害あり」すなわち「生理学的に見ても、米の酒は健康に良くない。」といい、さらに「麦 葡萄 馬鈴薯 皆人心に補ひある者なり。是れを以って酒をつくるべし。 葡萄は、奥羽・蝦夷辺に多く生れども捨てて取らず、空しく腐るに至る。是れを以って製すべし。」すなわち「麦・葡萄・ジャガイモはいずれも体によいものである。これらを原料として酒を造るのがよいだろう。葡萄は東北や北海道の地に多く野生しているが、収穫されることなく、腐ってしまう。酒は麦や葡萄、ジャガイモで造ればよい。」とつづけます。

・種痘

『管見』には「救民」という項目があります。わたくしたちの現代語訳版では、「種痘と性病予防」としました。この項は「近頃、西洋に於いて蒸気船・重力・種痘三つの大発明あり。」という一文でときおこし、「日本にては未だ重力にて事物の道理を弁せず。蒸気船も未だ十分益あるに至らず。種痘の事に於いては、已に人民を救ふ、十万を以って算ふべし。」と日本の状況に言及します。

1850 年、会津藩でも種痘が開始されました。覚馬の母である佐久は率先して種痘を受けたといわれています。

目にはみえないウイルスをただしくおそれて適切な対応をする。子孫のために、一人一人が勇気をだして種痘を受ける。天然痘ウイルスは 1980 年についに撲滅されました。日本のみならず地球全体の、それも、その未来にまでも覚馬の心眼はみとおしていたのかもしれない。

・ソフトもハードも

人生 100 年、ウイズコロナ・アフターコロナといわれる現代。覚馬は「人心」の改革のみならず「人身」の改革をもこころざしかつその実現に尽力した人であったといえましょう。『管見』は、孫子の末までを視野におさめての提言、いわば未来の日本人への遺言といえるとおもいます。同志社ファンの皆様、いかがでしょうか。

人間をコンピューターにたとえれば、人身はハードウェアであり、人心はソフトウェアということになりましょうか。いかにすばらしいソフトウェアであっても、ハードウェアがお粗末であれば、ソフトウェアはその真価を発揮することができません。ソフトウェアの中でも OS にたとえうるのが裏のいう「知徳併行の教育」で、種々のアプリケーションソフトにたとえうるのが「専門の道」ということになりはしないかと愚考します。■